第３章　学校におけるコミュニケーション能力の育成に関する実践について

最近、学校の教育実践の中にインターネットなどの情報通信ネットワークを活用する例が増えてきました。そして、その様子がインターネットを用いてホームページでリアルタイムに発表されることもあります。学校間で連携を図りながら情報通信ネットワークを活用するプロジェクトも、その実践の成果や課題が公開されてきています。平成９年 10 月に開通した京都府教育情報ネットワークシステム（以下「京都みらいネット」という。）が３年目を迎え、接続している学校においても、ネットワーク活用の様々な取組が行われるようになりました。本章では、その中からいくつかの取組について紹介し、今後の活用について考察します。

１　マルチメディア通信による交流学習の実践

(1) はじめに

長岡京市立長岡第七小学校（以下「第七小学校」という。）は、平成 11 年４月に京都みらいネットに接続しました。その後、授業の中で積極的にインターネットの活用を取り込んでいます。同年９月には、当総合教育センターの技術支援のもとに「第 26 回体育大会」の様子をインターネットを通して放映しました。更に平成 11・12 年度の長岡京市教育委員会指定の教育実践推進校として「心の教育」の研究に取り組んでいた第七小学校は、同年 11 月に教育実践研究発表会を実施しました。その研究発表会において情報通信ネットワークを活用し、他校の児童との交流学習でコミュニケーション能力の育成を図ることをねらいとした公開授業をしました。ここでは、その概要と成果を記します。

(2) 取組の概要

その授業の概要は、次のとおりです。第七小学校では、第６学年の児童が道徳の授業として取り組み、調べ学習したことをグループごとに発表します。その様子を映像と音声でリアルタイムに京都みらいネットを通して大山崎町立大山崎小学校と八幡市立有都小学校に送信します。参加した二つの学校では、第６学年の児童がコンピュータの画面を通して発表を視聴します。一つのグループの発表が終るたびに発表に関する質問を受ける時間が設けられています。二つの学校の児童は、質問や感想をこの取組のために設定した電子掲示板に書き込みます。その質問に対して発表したグループの中で担当した児童が回答します。このような形で授業が進められました。

(3) 授業の概要

この公開授業は第６学年の道徳の授業で、その概要は次のとおりです。指導は、学級担任と情報加配教諭によるティーム・ティーチングで行われました。

- 主　　題　　「『尊い命』～体験学習で学んだもの～」
- 内容項目　　「３－(２) 生命尊重」
- 指導目標

ア　「いのち」について考え、「生き方」を学ぶ。
イ　体験活動を通して、「心の開放」を行い、素直に感じる心を育てる。
ウ　自己決定・自己解決と体験・共有・交流学習を柱に、自身や他者と向き合うことにより「生きる力」をはぐくむ。

・　本時の目標

ア　体験・交流活動をする中で学んだ(心に響いた)ことを体験別グループでまとめ、一番伝えたいことを中心にして分かりやすく発表する。
イ　グループ発表や自分たちのまとめを聞き、質疑応答や話し合いをすることで体験学習で学んだ(心に響いた)内容を共有・深化する。
ウ　「いのちとは何なのか」を活動を通して自身の心の変化と合わせて考える。

この学級では、今までの学習経験を生かし四つのグループに別れ、それぞれの学習計画に従って調査・体験・聞き取り活動を行いました。

それらを基に伝えたい内容を明確にし、より分かりやすく伝えられるように前時間までにまとめました。

図３－１は、児童が声の大きさやマイクの使い方などに配慮しながらグループ発表している様子です。グループの発表終了後、発表を聞いた他の児童が質問し、それをグループの中で担当した児童が回答します。

その様子を受信している二つの小学校では、コンピュータ室のモニターで視聴しながら、手元のコンピュータから電子掲示板に感想や質問を書き込む形で授業に参加します。図３－２は掲示板に書き込まれた内内容の一部です。

二つの学校の児童からの感想や質問は情報教育加配教諭によって読み上げられました。質問を受けたグループは、同じようにグループの中で担当した児童が答えていきます。この場面では、見えない相手との交流であることなどから苦心しながらも、コミュニケーションを図ることができるように熱心に取り組んでいました。

図３－１　発表する児童

図３－１　掲示板の書込

(4) 成果と今後の展開

この授業は通常よりいくぶん長い 55 分間で計画されていましたが、児童は、最後まで集中して取り組んでいました。児童は、プレゼンテーションソフトを有効に利用しながら、聞き手が分かりやすいように意識して大きな声で発表していました。更に質問に対する回答においても、質問の内容にかかわっている児童が適切に対応していました。

今回の授業の前後での児童の変化として次のような点が見られました。

- 児童が自分の伝えたいことをどのように言えば相手により分かりやすく伝えることができるのか何度も練り直し、真剣に考えていた。
- この授業までは、消極的な面が目立つことがあったが、この体験で授業中の意見や発表が増えた。
- インターネットに対する興味・関心が高まるとともに、他校との交流を視野に入れた学習活動に意欲をもつようになった。
- 交流授業において、発表に真剣に耳を傾けてくれる相手がいることを意識する中で、児童に一定の緊張感と一体感をもたらし「他者を『一層』理解する」ようになった。

今回の公開授業をコミュニケーション能力の育成の点から考えると次のことが言えます。児童に情報発信の場を与え設定することにより、児童が他校との交流を意識して情報収集や整理、まとめを主体的に行うようになりました。指導に当たった先生は「この効果は、普段の授業にも波及し、児童の学ぶ姿勢が変わってきた。」と言っています。これは、コミュニケーション能力の育成という点で大きな成果があったと考えられます。

このような情報通信ネットワークを通した交流が成功した背景は、日頃からの実践の積み重ねによるもので、日々のきめこまかな指導の成果であると考えられます。次の図３－３と図３－４は、児童の日記を許諾を得て抜き書きしたものです。

> 11 月 26 日の５時間目、公開授業があった。始まる前から緊張していました。１時 30 分にコンピュータルームに集まって少し待っている間とか、お客さんがとなりと後ろにいたので、よけいに緊張しました。私はクラスの中で一番に発表するのでそれも緊張しました。それで私は、発表するのに、二つの目標を決めていました。一つは、大きな声で、はっきりしゃべる。二つは、前を向いてしゃべるです。
>
> …… 中 略 ……
>
> 発表し終わった時は、ほっとしました。目標は、自分では、できたと思います。
>
> それに、授業がインターネットを通して他の学校にもみてもらえたから、うれしかったです。
>
> …… 後 略 ……

図３－３　Ａさんの日記から

ぼくたちはいのちの勉強で、学んだことをみんなに報告するというものがあった。きんちょうしていたけれど、一緒に発表していたＣ君がはっきり言ってくれたので、ぼくも自分なりにはっきりいうことができた。別の学校と勉強ができるなんてすごいなぁと思った。発表したあとにしつもんがかえってくるのは、とてもきもちのいいものだと思った。

……　中　略　……

この勉強をして、命はお父さんやお母さんや友達と築き上げた、大切なものだとわかった。

図３－４　Ｂ君の日記から

なお、二つの小学校からは、電子掲示板への質問や感想を記入する場面で、児童が一生懸命キーボードを打っていた様子が報告されています。

今後、各学校においてこのような授業を実施する際の展望としては、課題がいくつかあります。その一つめは、このような学習環境を設定することは、ある程度の機器整備が必要であり、かつ時間的・技術的な労力を必要とする点です。これは、機器の性能向上や技術の進展により解決されるものと考えられます。

二つめの課題は、交流授業を実施するためには、相手校探しが必要であり、事前の日程・内容の調整等の事前準備がたいへんです。今回の参加校は、第七小学校が京都みらいネット上のメーリングリストを活用して呼びかけましたが、このような授業を実施する学校が増え、慣れてくることにより解決するものと考えられます。